

新 おおさか KEYワード【第13回】

おもしろ名所案内の言葉づかいも 時代とともに

書きたいとは思いつつ、とりあげるのが難しいテーマがある。ひとつは文楽や歌舞伎、落語や漫才をはじめクラシックから歌謡曲まで、これぞ大阪という舞台芸術である。画像の掲載に著作権や肖像権の問題があり、とりあげづらい。

もうひとつが「大阪弁」である。言葉は歴史に培われた文化のエッセンスであり、大阪の貴重な財産だが、どんな写真を掲載しようか考えると頭をかかえてしまう。

子どものころ、親父に「このあんぼんたん」と叱られたものだが、たとえばこの言葉をとりあげ、「あんぼんたん」のサンプルとして私の写真が表紙では、せっかくのカラー紙面がもったいない。手に入りやすいビジュアルのなかから人の目を楽ませるものを選び、それに絡んだテーマがどうしても多くなる。



「あんぼんたん」とは僕のことです。幼稚園のころの筆者、昭和37、38年頃

そんな思案をしていたところ、大正末から昭和初期と思われる絵はがきを思い出した。市内の名所を大阪ことばで案内したもので、仮に“おもしろ大阪弁名所案内”とでも呼べるシリーズである。

表紙に載せたのが道頓堀。通りを東を向いて見たもので、中央の劇場は角座、左はしの建物は太左衛門橋南詰にあった交番である。画面上の案内文に、古い大阪ことばの味わいが感じられるのではないだろうか。

「エライ人ダッシャロ 毎日コナイニ遊ブ人ガウジヤウジヤシテ不景気シラズノ場所ダツセ 歌舞伎芝居ノ本場ダスサカイ浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座、ト五ツノ櫓ガ並ンデイツモオ祭りノ様ダス 千日前ハ角座ノ横町ヤデ 見ニ行キマホー」

現代の若い人にはなんのこっちゃ、意味がわかりにくいかもしれないが、「ダッシャロ」は助詞の「だす」の活用で、標準語の「です」、京ことばの「どす」にあたる。「エライ人」は「たいそうな人出」の意味で、偉い人ではない。道頓堀五座を西から記し、「横町」は「よこまち」と発音するのだろう。「見ニ行キマホー」は、「見に行きましょう」がサ行からハ行へ転訛した「まひょ」に勢いをつけたものである。「ウジヤウジヤ」してて、わるおました。

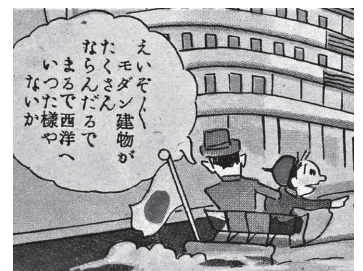
上方落語ではあたりまえのように用いられる「だす」だが、日常生活での用い方は微妙らしく、船場に生まれた牧村史陽(1898~1979)の『大阪ことば事典』(講談社、昭和54

年刊)では、「大阪弁の代表的なものとなっているが実は多少品の落ちる言葉」としている。「上流の家庭ではダスは決して使わず」に「ソオデス」「ソオデンナ」「ソオデッカ」を使い(或いは「サイデス」「サイデンナ」「サイデッカ」、丁寧に話すときは「すべてゴザリマスであった」と明言している。

「だす」を連発する絵はがきのシリーズの言葉づかいは、いかにも庶民的な、大阪のおじさんに大阪の街を案内してもらっている臨場感を演出したものと思われる。

同様に大阪ことばを用いた名所案内絵はがきは、他にも「ぼん」と「おっさん」が市内を巡る千葉かずのぶが描いた『滑稽漫画大阪見物』がある。昭和12(1937)年ごろと思われ、こちらの方が年代が新しく、言葉づかひも少し現代風である。

心齋橋筋の雑踏では、二人がはぐれて「うわーえらいこっちゃ ぼんが紛失おった 大変や」「おっさんどこへ行てんのんや わいさがしたんやで」とな



「おっさん」と「ぼん」、千葉かずのぶ『滑稽漫画大阪見物』昭和12(1937)年ごろより「大阪モダン街」(部分)

ったり、桜宮では「ここ造幣局云ふてな、日本の金貨や銀貨をつくるとこやで えらいもんやろが……」「おっさんいつも、金ないー云ふてんのやさかい、ここへたと注文したらどうやね」という掛け合いになる。

サラリーマン風の「おっさん」が案内役で、台詞に「だす」を用いていない分、モダンな感じがする。行く先も、新しく開通した地下鉄の駅や、近代建築が立ち並び、飛行機が飛ぶ中之島界限の「大阪モダン街」などだ。

観光艇船上で「おっさん」は「モダン建物がたくさんならんだるで まるで西洋へいった様やないか」と賛嘆の声をあげるが、さすがに「まるで西洋へいった様だす」や「西洋へいった様でおます」とはならない。現代にこうした絵はがきがあるならば、どんな言葉づかいだろうか。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現象—』(創元社)など。